

子どもを真ん中においた地域づくりをすすめる
～滋賀県社会福祉協議会の新たなChallenge～

子どもの笑顔 はぐくみ プロジェクト

START



福祉しが 287号



目次

「子どもを真ん中においた地域づくり」をすすめる ～滋賀県社会福祉協議会の新たなchallenge～	P 2
“子どもの笑顔はぐくみプロジェクト”とは	P 3
呼びかけ人代表メッセージ	P 5
ハグ♥トーク	P 6～15
“子どもの笑顔”のスポンサーの方々	P 16

発行日
2017年(平成29年) **10月**

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会
<http://www.shigashakyo.jp>
〒525-0072 草津市笠山7丁目8番138号
TEL 077-567-3920 FAX 077-567-3923



「子どもを真ん中においた地域づくり」をすすめる ～滋賀県社会福祉協議会の新たな Challenge～

滋賀県社会福祉協議会 会長 渡邊 光春

滋賀県における子ども食堂は、「滋賀の縁(えにし)創造実践センター」(以下、「縁センター」)のモデル事業として大きく育ってきました。

今や、滋賀県下に70カ所を超える子ども食堂が運営されています。社会福祉法人や自治会など、さまざまな主体によって運営され、そこにさまざまな人たちが関わっています。

縁センターは、制度の狭間にある問題について、滋賀県でしっかりと取り組み、定着化、普遍化させていこうと、5年間の期限として発足し、あと2年となりました。

その取り組みの一つである「遊べる学べる淡海子ども食堂」の実践から見えてきたものが三つあります。それは「三つのC」です。

一つ目は、地域のなかで、地域の人たちや子どもたちの Communication (コミュニケーション) が、非常に活発になってきたところが多いということです。

二つ目はそういう中で、潤いのあるコミュニケーションがある Community (コミュニティー) ができてきました。

そして、三つ目は、こうした営みが人口減少社会、少子高齢社会における地域社会像を提示しているのではないかとことです。地域社会への Challenge (チャレンジ) のCと言えるのではないのでしょうか。

この三つのCに確信を得て、滋賀県社会福祉協議会として、モデル事業を一般化し、滋賀県で定着させるために、新たなプロジェクトを起こすべきであると決断しました。

この滋賀県社会福祉協議会の新たな Challenge が、「子どもの笑顔はぐくみプロジェクト」です。

このプロジェクトは、滋賀県で暮らす人や活動する企業・事業所の子どもたちへの温かいまなざしと、子どもたちの可能性を育もうという知恵を結集しようとするものであり、子ども食堂の実践からみえてきた、「子どもを真ん中においた地域づくり」をさらに進めるための「応援団」をつくるプロジェクトです。

まずは、滋賀県にある約3,000の事業所のうち、すでに「淡海子育て応援団」に登録している約1,500事業所の倍増を目指します。

そして、滋賀県のさまざまな立場、世代の方々3万人に、このプロジェクトに関わっていただき、3億円の基金を造成し、県内の小学校区に最低1カ所、合計で約300カ所の子ども食堂をつくっていきたいと考えています。

その先に見えるのは、まさしく「潤いのあるコミュニティ」です。

こうした趣旨にご賛同いただいたさまざまな立場でご活躍いただいている方々に、このプロジェクトの呼び掛け人になっていただいております。

滋賀県社会福祉協議会は、「誰もが“おめでとう”と祝福され“ありがとう”と看取られる地域づくり」を目指して事業に取り組んでまいりました。

このプロジェクトは、縁センターの目指す地域づくりを担う「人づくり」です。志をもった人づくりの実践です。

それは「潤いのあるコミュニティ」の創造であり、そのコミュニティを次世代に継承していくことが、まさしく滋賀県社会福祉協議会の社会的使命であり、存在意義であります。

その決意のもと、役職員一丸となってこのプロジェクトに Challenge して参ります。



“子どもの笑顔はぐくみプロジェクト”とは

「子ども食堂」の継続的な運営などをバックアップし、子どもを真ん中に置いた地域づくりをさらにすすめるための応援団＝“子どもの笑顔”のスポンサーをつくるプロジェクトです。滋賀県社会福祉協議会が事務局となり、“子どもの笑顔”のスポンサーの志で、さまざまな背景を抱えた子どもたちが、ほんとうにうれしい気持ちになれる居場所が滋賀県内にくまなくひろがり、子どもたちの笑顔を育むコミュニティづくりを目指します。

プロジェクトの5つの目的

- ① 子どもを真ん中に置いた地域づくり
- ② 「遊べる・学べる淡海子ども食堂」*の安定的・継続的な運営をサポート
- ③ 地産地消で食育・子どもの健康づくり
- ④ 虐待から子どもを守る
- ⑤ 児童養護施設等で暮らす子どもたちの社会への架け橋づくり**

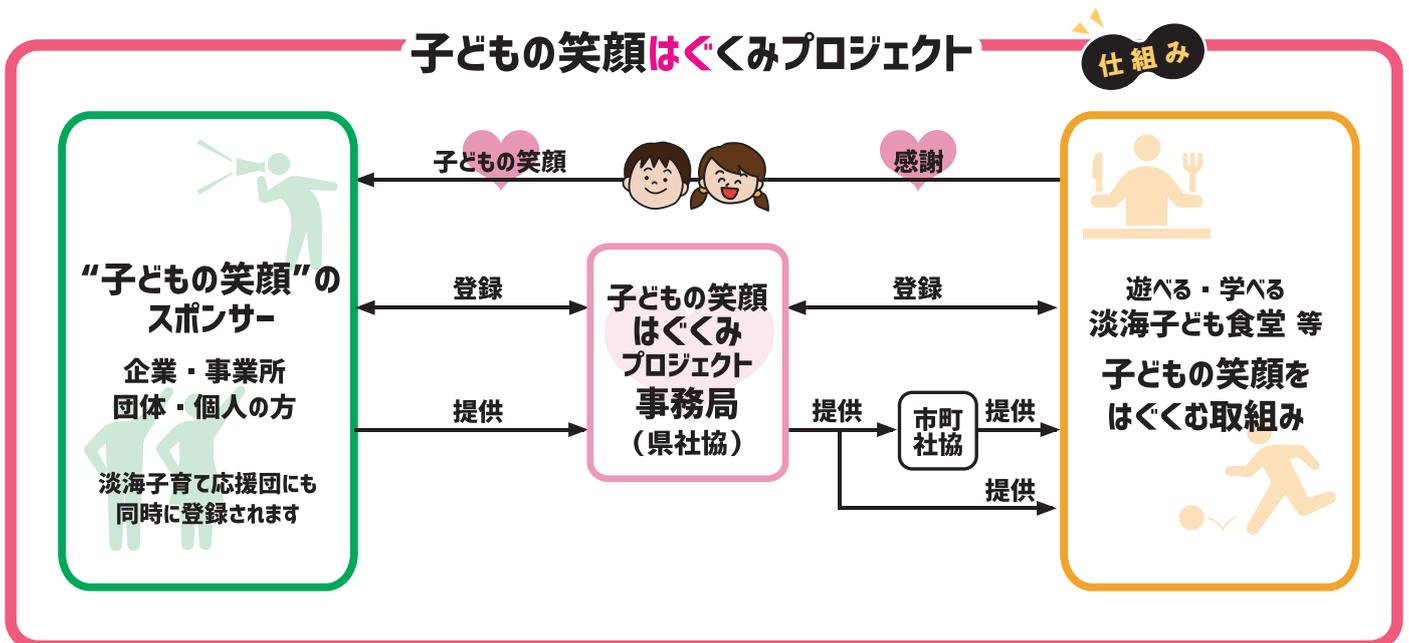
* 「遊べる・学べる淡海子ども食堂」

遊べる・学べる淡海子ども食堂は、子どもたちへのあたたかいまなざしに満ちた地域の手づくり食堂（コミュニティレストラン）です。

さみしい気持ち、つらい気持ち、しんどい気持ちの子どもも、もちろん元気な子どもも、ここに来たらあたたかいごはんとあたたかく迎えてくれる大人が待っています。働き世代、高齢者世代、そして子ども世代、滋賀の子ども食堂はみんなの食堂です。

** 「児童養護施設等で暮らす子どもたちの社会への架け橋づくり」

虐待をはじめ、さまざまな理由で親と一緒に暮らすことができず、施設や里親・ファミリーホームで暮らしている子どもたち。退所の年齢になると一人で自立して社会で生活していかなばなりません。「社会への架け橋づくり」は、企業・事業所や地域の支援者の協力のもと、子どもたちが自分の力で社会とつながり、自立への道を歩むことをみんなで応援する取り組みです。



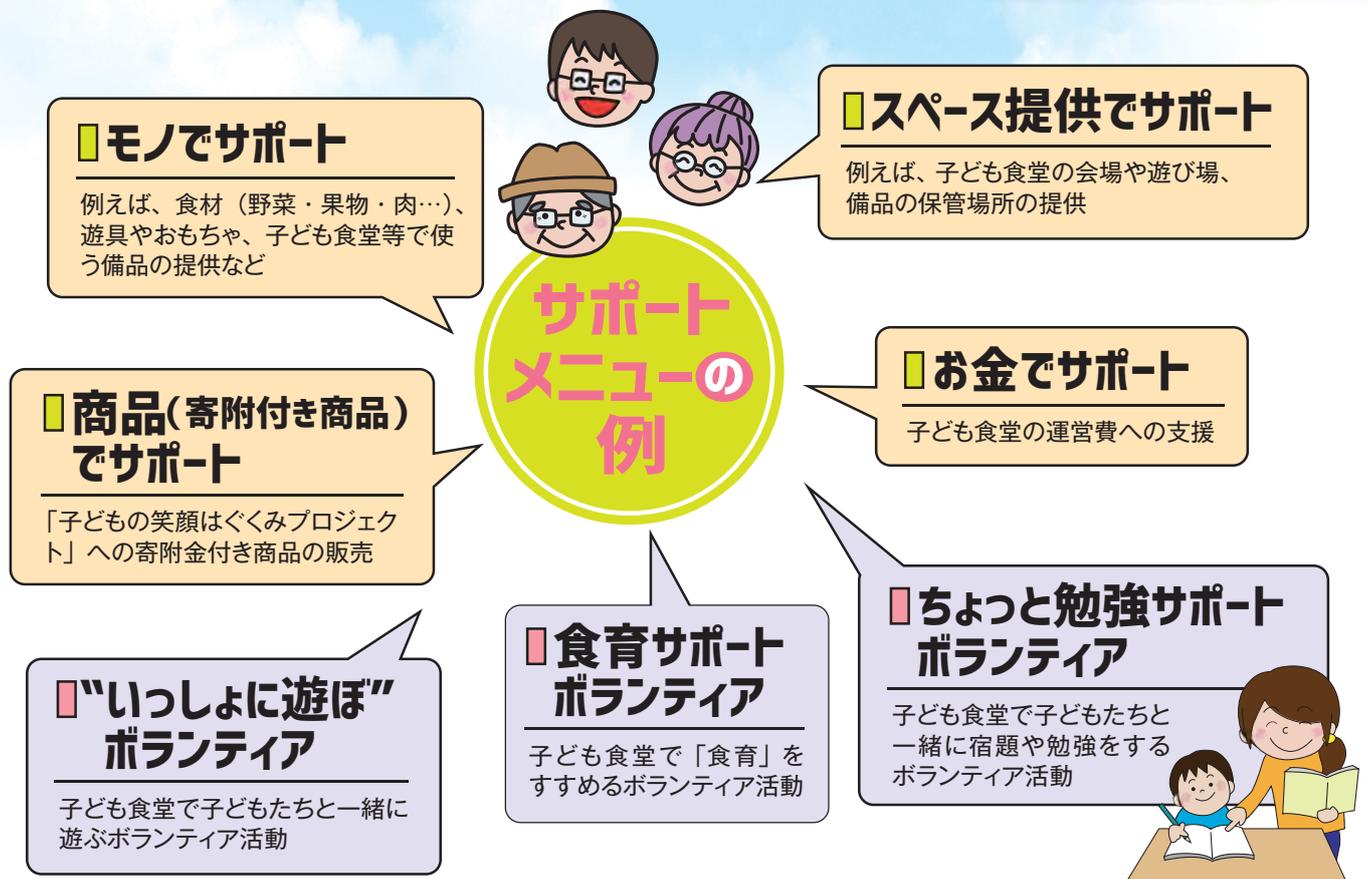


小学校区に一つの子ども食堂(300ヵ所)があり、3,000事業所、30,000人の人びとが子どもの笑顔をはぐくむ活動に集い、3億円分の基金(モノやお金)が応援団として集まり、みんなで滋賀の子どもをハグする! こんなすてきな滋賀を共につくりましょう。

“子どもの笑顔”のスポンサーとは

「子どもの笑顔はぐくみプロジェクト」の趣旨に賛同し、登録いただいた企業・事業所、団体や個人の方がスポンサーです。スポンサーに登録いただくと「淡海子育て応援団」※にも同時に登録されます。サポートメニューとしては、以下のようなものがありますが、“子どもの笑顔のために”できることならばなんでもOKです。いろいろな方のいろいろなサポートを募集しています。

※滋賀県が子育て家庭を応援するサービスの提供などを行っている事業所を「淡海子育て応援団」として登録し、そのサービス内容はホームページ等により発信されています
(<https://www.hugnavi.net/cheer/index.php>)





“子どもの笑顔はぐくみプロジェクト” 始動宣言 滋賀の子どもをみんなで抱きしめましょう！

滋賀経済団体連合会会長 大道 良夫

この世に生まれてきた子どもたちは、ひとりのもれもなくかけがえない存在であり、その笑顔は無縁社会といわれる世の中にやさしい光を注いでくれます。

しかし、その彼ら彼女らのなかに、見えにくいけれど、さまざまな家庭状況や背景から、さびしさやしんどさを抱えた子どもたちがいます。こうした子どもたちを孤立や困窮のなかに放っておかず、ほんとうに安心して輝く笑顔でいられるようにと願う大人たちが、子どもを真ん中においてつながりはじめました。

台所の音、ごはんのにおい、よそゆきでなく温かさに満ちた言葉のにぎわい。

ごはんをつくってくれる人、いっしょに食卓を囲む人、あそびを教えてくれる人、野菜やお米を届けてくれる人。

子ども食堂に集まってくださるさまざまな人たちが、

地域の子どもたちを愛情たっぷりに抱きしめてくださっています。そして同時に、食堂に集まってくる子どもたちが発する優しい光が、さまざまな人たちをつないでくれるように感じます。この光景をみていると、子どもを真ん中においた地域づくりは、すべての人々を大事にし合う地域をつくっていく営みであることを実感します。

こうした営みのなかで私たちは、滋賀の子どもたちが人を愛し、人を信じ、自分の力で将来を切り拓いて行けるよう、彼ら彼女らをいっぱい愛し、みんなで抱きしめたいとの思いを強くしました。

私たちは、今ここに、「子どもの笑顔はぐくみプロジェクト」の始動を宣言します。

企業や事業所も住民も一緒になって、「何かできることがあるんじゃないか」と気づいた人がともに実践しようではありませんか。

滋賀の子どもをみんなで抱きしめましょう。

平成29年8月20日

呼びかけ人

三日月 大造 (滋賀県知事)	大道 良夫 (滋賀経済団体連合会 会長)
中川 清之 (滋賀県農業協同組合中央会 会長)	北川 陽子 (ファブリカ村 村長)
今関 信子 (児童文学者)	藤岡 いづみ (野菜ソムリエプロ)
木田 桃子 (地域おこし協力隊)	中村 匡希 (地域おこし協力隊)
田口 宇一郎 (滋賀県産業支援プラザ 理事長)	猪飼 剛 (滋賀県医師会 会長)
芦田 欣一 (滋賀県歯科医師会 会長)	廣原 恵子 (滋賀県看護協会 会長)
大原 整 (滋賀県薬剤師会 会長)	則本 昂大 (東北楽天ゴールデンイーグルス投手)
湯浅 誠 (社会活動家・法政大学教授)	村木 厚子 (元厚生労働事務次官)
渡邊 光春 (滋賀県社会福祉協議会 会長)	



すべての子どもたちが「生まれてきてよかった」と
心底思える滋賀の地域をつくっていこうという運動が
「子どもの笑顔はぐくみプロジェクト」です。

平成29年8月20日(日)にピアザ淡海で開催した
キックオフ集会の「ハグトーク」から、このプロジェクト
へのメッセージをお届けします。

ハグ♥トーク

「ハグ♥トーク」
出演者

- 社会活動家・法政大学教授 湯浅 誠さん
- 滋賀県知事 三日月 大造さん
- ファブリカ村 村長 北川 陽子さん
- 子ども食堂ひがしっこ 代表 小西 由美子さん

湯浅

子どもの笑顔をつくろうというときに、どうしても
笑顔になれない子もいるという現実があり、その現
実を踏まえて、「全ての子が」というところに「子ど
もの笑顔はぐくみプロジェクト」始動宣言」のポイン
トがあります。

では、そのために何ができるのか。その一つの
ツールとして、「子ども食堂」があるのですが、それは
どういうもので、解決の手法として有効なのか。本
当に子どもたち全員が笑顔になることができるのか。

それに対して、運営者の方たちはもちろんですが、
それ以外の、地域住民の方たち、企業、行政の方
など周りの人たちは何ができるのかという話をし
ていきたいと思います。

「ハグ♥トークの視点」は、五つです。

まず、三つめから始めましょう。

子ども食堂についていろいろ言われています。滋
賀県にもずいぶんできた。しかし、「いい取り組みら
しいけれども、こういう懸念も聞いている」という
ところから、始めていこうと思います。

北川

私は、東近江市の地場産業・麻織物の工場を拠
点として、いまは仕事というよりは居場所づくりとい
うかたちで、古い工場を改装し週末のカフェギャラ
リーをしています。

また、子どもの民家と書いて「子民家」という居
場所にも関わっています。そこでは保育の中に文化・
芸術を取り入れたり、地域の産業を伝えるために、
地域の職人さんと繋げたりしています。

湯浅

子どもの民家と書いて、「子民家」。

北川

古い「民家」ではありませんが、子どもを中心
にということで、「子民家」とネーミングしました。地
域の職人さんや大人の手を借りながら子どもたちと
遊んでいるのですが、活動を始めた5年ぐらい前か
ら、その親子教室の中で、みんなで一緒に食事を
しています。

今回は子ども食堂についてですが、私の中で子
ども食堂は、最初はなんとなく、「貧困」という言
葉が先行していました。貧困とはそれぞれにプライ
ベートなことなので、どこまで踏み入れていいかも
分かりませんでした。貧困というイメージが私の中
であるのに、現状の子ども食堂は、「みんなで仲良
くご飯を食べている地域のコミュニティーではない
か」と、子ども食堂をどうとらえたらいいのかすぐ
違和感があります。

湯浅

子ども食堂というと、貧困の子どもを集めてご飯
を食べさせるイメージであったのが実際の運営など
をご覧になって、ギャップがあるので戸惑ったとい
うことですね。そういう声は、周りからも届きますか。

北川

「子ども食堂って最近増えているよね。補助金も
もらえるからとちがうの」、とか「数を増やしてほしい
から増やしているのではないか」とか思うわけです。



湯浅

数が目的になっていると。小西さんはいかがですか。

小西

私は去年の12月に、子ども食堂を立ち上げました。本来の子ども食堂の対象は、やはり、貧困家庭や一人で食事をしている子どもであると思っていました。しかしそう決めてしまうと、子ども食堂に来るのは特定の子どもたちと思われ、それがいじめの対象になるのではないのかという思いがありました。それで、「誰でもが来ていいよ」ということにして、子どもから高齢者まで来ていただいています。

その中で、本当にそういうことを抱えた子どもさんが自然と、皆さんと一緒に来られるようになればいいかなという思いがあり、立ち上げました。

湯浅

実際には、どんな子どもたちが、どんな感じで来ているのですか。

小西

いまは普通の家庭の子どもさん、一人暮らしの高齢者、老々世帯で暮らしているらっしゃる高齢者、そして親子や、ファミリーでも来られています。立ち上げて9カ月になりますけれども、本当の意味で来てほしい子どもさんにも現在、来ていただいています。

湯浅

もともと、子どもたちと一緒に食事をする活動は自治会でもありましたし、いろいろな人たちがいろいろな形でしていましたが、「子ども食堂」というネーミング自体は2013年からです。

東京都大田区で「だんだん」という八百屋を営んでいる近藤さん*が名前を付けて、その暖簾を垂らすようになり、それで広がったということがあります。近藤さん自身は、孤食の子～一人ぼっちで食事をしなくてはいけない子がいる、そういう子たちと一緒に

に食べる場をつくりたいという思いで始めています。

※子ども食堂「気まぐれ八百屋だんだん」近藤博子さん

「だんだん」は、鳥根弁で「ありがとう」という意味で、「孤食の子にいろいろな人たちが関わる活動を通じて、ありがとうと言いつけ合えるような地域づくりをしたい」という趣旨で始めたものです。そういう意味では、これは地域づくりですね。

こういうかたちの子ども食堂がかなり広がっています。子どものターゲットを絞ってしまうとどうしても、「あそこに行く子は」というように見られてしまう恐れがあるので、「どなたでもどうぞ」というふうにしているところが8割方ではないかと思います。

しかし、実際に運営している人の外側にいる人たちは、「そういう子だけ集めて食事させているのでは」と思っている方も多いため、そこはねじれてしまっているような感じがしています。

知事は、いろいろな分野で、いろいろな方たちの声を聞かれると思いますが、滋賀県の方たちにそういう反応は多いですか。

三日月

多くはありませんが、北川さんがおっしゃったように、「子ども食堂は、困っている人、食べられない子どものためにあるのだ」という報道もありましたので、そういう印象をお持ちの方もいらっしゃるでしょう。

実際には、地域の多様な子どもたち、高齢者の方々も参加されています。もちろん、困っている子どもがいれば、手を差し伸べたり、行政につないだりもされています。今日のフォーラムを契機に、さらに子ども食堂に関わる人たちを増やして、意識のギャップ、ねじれを埋めていければと思います。

湯浅

いろいろな方が関わってくると、そういう目もなくなっていくでしょう。多くの方はまだ様子見という感じだと思います。

「ハグ♥トーク」の視点

- ① 子どもの貧困問題と地域社会の発展との関係は？
- ② 「子ども食堂」はどんな目的をもった、どんな活動か？
- ③ 子ども食堂への世間の目は？～あたたかいまなざし、批判的なまなざし～
- ④ 子どもを真ん中においた地域づくりは、地域社会を変える！
～大人をつなぐ、地域の発展をつくる～
- ⑤ 滋賀県民、滋賀の地域経済、地域産業の関係者による具体的な実践をひろげよう！

三日月

小西さんにぜひお聞きしたいのですが、本当に子ども食堂に来てほしいご家庭にとっては、みんなが来ていると逆に来られなくなる可能性もあります。一人で食べている子どもたちを、どうやってその場に来てもらうのか、その知恵や経験があれば教えてくださいませんか。

小西

子ども食堂は貧困家庭対象ということで、そこに子どもを行かせたら、みんなにうちが貧困だと思われるのかという親御さんもいらっしやいます。

実際、私たちは、どこの家庭が貧困なのかといった詳しいところまでは把握できません。ただ、地域として普段、子どもたちの見守りをしていく中で、この子どもさんの家庭は少し問題を抱えているなということが分かってきます。そのときに、何かしてあげなければいけないという地域の皆さんの思いがあり、その子どもさんに声掛けをしていきます。

けれども、声掛けをしても、「声を掛けられたから行きます」ではないですね。やはり様子を見るのです。様子を見ている中で、一度、参加したときに、子ども食堂の中の雰囲気、落ち着けるなあ、友だちがたくさん来ているなあ、おいしいご飯を食べられるなあ、という温かい気持ち、たぶん子どもに伝わっています。

それによって、一歩踏み出せなかった子どもさんが、1回来ただけで、次の月から、こちらから声を掛けなくても、子どもさんの方から「次、いつあるの」という声が出てきたのです。これで、私たちは、目的の子どもさんが中に入って来られるようになったと思えました。それで、本当にこの食堂をやってよかったなど。これからもそういう子どもたちが食堂に参加してくれればいいと、私たちスタッフ一同思っております。

三日月

今のお話の中で二つ、なるほどと思って聞いていました。一つ目は、その場に来た子どもが「なんかここは温かいな、楽しいな」と思える場づくりをしていること。二つ目は、見守りやつながりのきっかけづくりの場であることです。多くの場合はそ

れが主目的なのかもしれません。しかし、本当に困っている子どもたち、何か様子が違う子どもたちを見つけて、行政や学校等につないでいくことも大切です。私たち県だけでなく、市や町も、子ども食堂を運営して下さっている方々と絶えずコミュニケーションを密にとっておくことが重要だと感じています。

湯浅

先ほどの小西さんのお話は、看板にどんと掲げないということですね。食堂だけに看板やメニューが大事なのですが、メニューに困っている人にどうのこうのと書いてあると、むしろ行きづらいですね。でも、気付いたときには対応する必要がある。

岩手県の盛岡で子ども食堂をしている山屋さん*という人は「うちの子ども食堂には隠れメニューがいっぱいあるのですよ」と言ったのです。いま知事がおっしゃった分かりやすい例で言うと、虐待などのサインに気付いたときに、子ども食堂を運営する人たちはどうしたらいいかを知っている。でも、表看板に掲げていると、子どもたちが来づらくなってしまふから、表メニューには載っていない。でも、必要なときに出来る裏メニューがいっぱいあるというのです。

そうすると、いろいろな人たちが関わりやすいし、もし課題を抱えている子どもが来ても、それは別に、ほかの子と全然違わないように関わる。でも、そのときに何かサインを感じ取れば対応もできる。たぶん、それは子ども食堂に限らず、北川さんのところもそういうふうにしていらっしゃるのではありませんか。
*特定非営利活動法人リンクル岩手理事長 山屋理恵さん

北川

そうですね。おなかを満たすだけではなく、個食になりがちでワンプレートで成立しているところを、大勢でご飯を食べる、大皿料理をみんなで分け合って食べる。親子教室で食べるのですが、最初は、お母さんが自分の子どもの分だけ良いところを取ろうということがあったけれども、子どもたちにも、このお皿のものはこれだけの人が食べるということがわかると、少しずつ相手を思う気持ちが生まれてきます。配膳も、ご飯とおつゆの位置や、お座布団の置き方も、法事で親戚のおばちゃんたちとご飯を食べ、教えてもらうという昔は当たり前であったことがなくなっているの、そういうことを子どもたち、若いママたちに体感してほしいと思って、みんなで食事を囲んでいるだけなのです。

単なる食事ではない、そこを通じての学びの場、



湯浅 誠さん



その中におじいちゃんおばあちゃんの知恵などが入ってくるとすごくいいのではないかと。そういうふうに考えています。自然に発展していくといいですね。

湯浅

子ども食堂は安く食事を提供するということがあります。無料のところ、50円、100円というところが多いです。でも、マクドナルドのハンバーガーは100円ですよ。

そこで、「マクドナルドと子ども食堂、何が違うんだ問題」というのがあります。安いだけならマクドナルドと変わらないだろうという話があるのですが、そこはまさにファストフードで、時間をかけないところに意味があるわけですよ。逆に、子ども食堂は、時間をかけたり、食事以外のいろいろな体験、例えば、食卓を囲んだり、おばあちゃんがいろいろ教えてくれたり、そういうことが大きく、食事だけではないと思いますね。

食事、体験、時間。そして、何かあったときの隠れメニュー的なトラブル対応がある。たぶんそれがあって居場所と感ぜられる。食事だけだと居場所とはなかなか感ぜられないのではないかと思います。そういう意味で、子ども食堂は食事を出すだけの場所でないと思っていますが、どうですか。

小西

この間もハプニングがありました。ボーリングゲームがあるのですが、子どもたちが、ピンを逆さまに持ってチャンバラをされていて、ピンが全部壊れてしまいました。壊してしまったのはいけないけれども、そんな自由なことができるという場でもあるということですよ。

もう一つは、子ども食堂に来ている子どもたちから、折り紙が欲しいと言われて渡したところ、ずっと鶴を折っていたのです。帰り際に「小西さん、これ。ほんとにいつも小西さんたちにお世話になっているから、私たちの気持ちです」と言って、鶴を折ってつないだものをくれたのです。

そのときはすごく感動しました。子どもたちがここにご飯を食べに来て、遊んで、いろいろな学びをするだけではなく、そういう思いをつくることのできたのかなと思いました。もらった鶴は、スタッフみんなにも「もらったんよ」とお話しし、子ども食堂ののれんの両脇につるしています。

湯浅

居場所と感ぜられるというのはそういうことですよ。

うね。そういう気持ちを、何かの形で、誰かに言われるまでもなく示したくなったということでしょうね。

いま2番、3番の視点について話しました。小西さんのお話を中心に3番の話をしているうちに、どんな目的を持ったどんな活動か、何となくイメージが湧いたのではないかと思います。

1番や4番など、地域社会の発展や地域づくりとどういうふうに切り結んでくるのか。子どもの福祉の話ではないのか。福祉の人だけで進めているというお考えがある方もいらっしゃると思いますが。

北川

私は地場産業に関わっていて、地域の子どもたちにはいずれ地域で仕事をしてほしいので、いまは地域を好きになってもらうための活動をしているつもりです。自分たちの住んでいるところの産業を知ったり、茶摘みに行ったり、染め物教室をしたり、地域の中で体験をしてもらって、誇りを持ってもらって、地域を自慢できるような子どもたちをつくりたいと思っています。

その子どもたちが、未来の中心になっていくので、そのための活動だと思っています。それは仕事としても成り立っていくための、長い未来に向けての活動だと思って取り組んでいます。地域で仕事をするなり、地域の物を買うなり、いずれ地元に戻り、生活者になってほしいと思っています。

三日月

私は、地域社会が豊かで、そこに住んでいる人が幸せであってほしい、それをどうしたら実現できるのか常に考えています。

先ほどから話が出ているように、どんなときに幸せと感ぜられるのか、豊かだと思うかという、総じて誰かと一緒にいるとき、一人ではないとき、誰かの役に立っているとき、誰かと話しているときが、そのベースになっているのではないかと思います。だから、「寂しい」「困っている」と言い出しにくい子どもたちに、そういう場が提供されているというのは、豊かで幸せな地域社会をつくるうえで重要ではないかと思います。いつも誰かとつながって



北川 陽子 さん

いる状態はいいなと思ひながら、この子ども食堂を見ている。

湯浅

先ほど「だんだん」の近藤さんが「ありがとう」と言える地域づくりで子ども食堂を始めたと言いましたが、近江八幡市のむさっ子食堂の石田さんが「こんにちはで終わらない地域づくりがしくて、子ども食堂をやっている」とおっしゃっていました。

スーパーなどで近所の人と会うと、顔見知りだから「こんにちは」とは言いますね。向こうも「こんにちは」と返してくれるけれども、次に続くことはない。

もう少し、普段からいろいろなことを一緒にしていると、こんにちはの次に、「あれ、どうなった」というような言葉が出てくる。そういう地域づくりをしくて実践していると。そういうかたちで、地域づくりとも結び付いているのではないかと思います。

小西

私は自治会長をして今年で6年目になります。地域づくりというのは、自治会の役員がするのではなく、それぞれ地域の皆さんでしていくものだと思います。地域の中には、ボランティアをされている方や様々な活動をされている方がたくさんいらっしゃいます。そこで気付いたことは、その場で自分なりで終わるのではなく、それを共通のところで教え合っていかなければいけない。そういうところから地域づくりができてきていると、私はいつも言っています。

皆さん全てがそうではないのですが、気がありましたら必ず、「小西さん、〇〇ですよ」「あそこで〇〇があるよ」という話を、私にしていだけることになっています。

この6年間の積み重ねがあつて、やっとそういう方向に來たと思ひていますし、みんなで地域を創っていくことが本当に大事です。

いまはどこでも、自治会の役員は高齢者の方がほとんどですが、うちの自治会はそうではなく、40歳代、50歳代の働き手の方にも役員になっていただいています。その中で、子ども会の役員や子どもたちを取り込んだ行事を年間にたくさん行っています。子ども会の役員はお母さんが多い

ですが、後ろにはお父さんがつながつています。お母さんが出番で来ていただくことによって、お父さん方にも来ていただける。「隣の人は関係ない」というご時世ですが、若い方たちに地域づくりに参加していただけるよう頑張っています。

湯浅

気付いたことを自分一人に留めるのではなく、いろいろな人に伝え合うということ。そうやって、情報やノウハウを伝播させていく。子ども食堂は、そういう場の一つになっているということですね。

小西

この子ども食堂をする中で、地域の方からいろいろな話が出てきます。

子ども食堂は自治会費から出ているのかというようなお話がありました。そうではなくて、縁センターからの助成金だけでまかなっているの、友だちを通じて、地域で個人的に畑をされている方やものを作っている方にどんどん発信し、食材になるものをなんでもいいから下さいという話をしてしています。

三日月

いまおっしゃったように、みんなでやろうとか、食材をくださいと言っても、地域の方々から反感もあるかもしれないと思うのですが、どうやって理解を広げていらっしゃるのですか。

小西

民生委員を長くやっているの、地域の人によく知られているということが一つあります。もう一つは、自治会長をしているということです。女性の自治会長は、女性であるということで、お母さんにもなれるし、いろいろな面で細かいところに気が付くのです。

男性には気が付かないところに女性は気が付くと思われているのではないかと思います。

湯浅

子ども食堂に限らないですが、地域の方の理解が大事だと思います。それがなくて、みんなが遠巻きに見ているだけだと結局、子どもたちにも知れ渡っていかないし、紹介していいのかどうかも分からないし、みんなも様子見モードに入ってしまうですね。

だから、いろいろな人たちに関わってもらうためにも、自治会長や地域住民組織の方たちが、この取り組みをどういうふうに見てくれるかということが大事だと思います。



小西 由美子さん



北川

やはり、誰がしているかというのはすごく大事だと思います。やりたいという気持ちがないと、やらされている感では絶対にできません。私たちが活動を始めたのも、やりたいからです。私たちがなぜこんなことをしているのかということを理解してもらえよう、時間をかけてきたつもりです。

「子民家」と書いているので、子どもだけしか行けないのかという言われ方もしました。だから、同時に5年ぐらい前から、ぞろ目の日に、能登川の夢を語る会、能夢会(のむかい)という会をしています。それは、子どもというよりは地域の人たち、商店街の人とか、いろいろな大人の場所で、家族で来てもいい。私たちが創りたい場所を見せてきているつもりです。

湯浅

大人の居場所というか、混ぜこぜ、ごちゃ混ぜですね。

北川

ごちゃ混ぜでやっていくのも時間がかかるし、運営面でも補助がなくやっているの、参加費もかかります。でも、仲間に出会えおいしいご飯をみんなで食べられるので、行きたいと思う人は、500円、千円、会によっては2千円という参加費を払ってもらい、自主運営できるかたちを模索しています。

湯浅

なぜ、子ども食堂と地域づくりが絡むのかというと、子どもは将来地域を担ってくれるからという面もあれば、そこでいろいろな人が交流することを通じて、地域で顔を合わせる機会として、昔は自治会が担ってきたのかもしれませんが、そういう地域ばかりではなくなってきた中で、いろいろな関わり方をつくることの一つの切り口として行われているということですね。

そういうことが地域の人たちに浸透していくためには、地域の人たちが、より積極的に関わってくることが、まさに大事ですね。そういう現場を見ていただくと、百聞は一見にしかずですから、「なんだこういうふうになっているのか」というように気が付くこともたくさんあると思います。そういう場を増やしていけたらいいと思います。

さて、そういう中でいままでの話を聞いて、「では、自分たちでできることがあったら」と思った人に、何をしてもらいましょうかというお話です。

ちなみに、小西さんと北川さんのところでは、誰がどんな関わりをしているのですか。

例えば、農家の方がJAに出せない規格外の野菜を持ってきてくれるとか、お寺の人が場所だけ貸してくれているとか、お金だけではないいろいろな関わり方がきつとあったと思うのですが。

小西

お野菜の寄付ですね。知り合いの子どもさんが農家をされていて、子ども食堂をしているというお話をしていただいたところ、収穫した野菜を使ってほしいということで、いままで2か月ですが続けてくださっています。

ほかにはお米ですね。地元ではないのですが、県社協から日野でお米を寄付したいという方がいらっしゃるとお聞きし、日野まで頂きに行きました。地域によっては、地元の畑でつくったものを持ってきてくださいます。「次はいつするの?何が要る」というふうに声をかけてくださるので、その辺は本当によかったなと思いましたね。

北川

材料費程度しか払えないのですが、ご飯を作るのが得意な友だちが来てくれています。大人の会のときは、男の料理教室かというぐらい、つくりたい男性がいます。商店街なので園芸屋さんもいて、子どもたちと畑仕事をするとき、苗を提供してもらったり、つくり方のノウハウを提供してもらったり。絵本の読み聞かせが得意なおばちゃんがいるので「ちょっと刈っといたるわ」と言ってくれたり、お正月前に「門松を立てといたる」と言って、門松を立てに来てくれます。

また、いま流しそうめんの季節なので、大工さんが「竹を切ってきた」と持ってきてくださいます。皆さん、できることをできる範囲内でくださっています。だから、そこにお金をとは言われたいです。

でも、出してもらえばなしでは駄目なので、逆に、何かのときにはお手伝いに行くというようなお返しはしたいなと思います。



三日月 大造さん

湯浅

皆さんのそれぞれの得意を持ち込んでくれるという感じですね。小西さんのところはどうか。

小西

地域に先生をされていた方がいらっしゃいますので、子ども食堂に来ていただいて勉強を見ていただいたり、遊びをしていただいたりしております。それについても、何人かの先生にお話をしていますので、こちらから言わなくても、「次、ここに行きますね」ということを、先生の方から言ってくださいますので、とてもありがたいと思っています。また、公民館があり、そこの職員さんでマジックをする方がいらっしゃいます。

湯浅

例えば、将棋を打ちたい人が将棋を打ちにきてくれてもいいと思いますね。つまり、そうやってかまってもらう時間や、将棋を打ちながら話す雑談はけっこう大事です。食事もちろん大事だけれども、それ以外の配膳や時間を考えると、それぞれの得意を持ち込んでくれるのでいいと思うのです。

ちょっと遠方の子どもで、親が送り迎えするのが難しいようなお仕事をされていても送迎だけ担ってくれている方がいる。そういうことだと、送り届けたときに顔を見るから、どんな様子か教えてくれるという、そんな関わりをしてくれる人もいますね。

そういうことがいろいろと広がっていくと、その場も豊かになるし、関わってくれる人にもどんどんバリエーションが増えて、地域づくりにもよりいいのではないかと思います。地場企業では、どんな関わり方がありますか。

北川

カーペットをつくっているところがありますが、廃材となった繊維をいただいて敷き詰めてもらっています。それから、地域の仕事をしゃべりに来てもらったりしています。大工さんは、木の切れ端で積み木をつくってくださったりしています。地場産業だけではないけれども、お仕事の中でもできることを協力してもらったという例はあります。

湯浅

「ハグ♥トークの視点」で言うと、5番ですね。知事は、皆さんにはどのように受け取ってもらおうと一番いいと思われませんか。

三日月

皆さんには、「できることからやってみよう」と受け取ってもらえたらいいなと思いながら聞いていました。無理をして一部の人たちだけが負担してやると、やはり長くは続かないので、続ける仕組みが必要ではないかと思います。

そのために、企業や事業所といった経済界も含め、子どもの笑顔のスポンサーになっていただき、スポンサーの輪を広げていく。そして、先ほど湯浅さんがおっしゃったように、物やお金、場所の提供などの支援について、それぞれのスポンサーができることをやる、そういう輪が広がるきっかけになればなと思います。

湯浅

私は、子ども食堂の課題は5点だと思っているのです。

一つは人です。運営する人が必要だし、それこそピンポイントで食事をつくりに来てくれる人でもありがたい。「後片付けだったらやるよ」「食器洗いなら手伝うよ」という人でもありがたいかもしれない。ボランティアや運営者、そういうスタッフだけでなく、ちょっとしたお手伝いも含めて人ですね。

二つ目はお金です。食材を寄付してくれたら実際に買わなくて済むから、お金が少なくて済みます。例えば場所を借りるのにも公民館なら、そんなにかからないけれども、少しはかかるなど、そういうお金と食材。

三つ目が場所です。お寺や教会あるいは生協さんが貸してくれる。いろいろな話を聞きますが、それなりの人数が集まる自前の場所はあまりないです。こういう場所が借りられるお金があれば別ですが、普通はありません。そういうこと言うと、場所の確保にご苦労されているところもあります。自宅を開放しているところもありますが、そんなところばかりではなく、転々とせざるを得ないところもあります。

四つ目が、連携と言ったらひとつくりになってしま



うけれども、要するに、つなぐということ。例えば、活動を地域の人がまったく知らないこともありますね。そういうことを話題にしてくれたり、学校の先生が関わる中で、こういう仕組みがあるのだと他の先生に伝えてくれたり、あるいは、自治会長に理解してもらおうか。そういうことがないと、安心して子どもたちに紹介できる場所なのだと思いますね。

そういうことで、地域性を得るためには、ご自分たちで知らせていくことも含めて、広報や連携です。お金も食材も出せないけれども、いろいろな人に伝えていくことならできるといような、「知り合いが自治会長だから話してみるよ」ということでも、かなり大きなサポートだと思います。

五つ目は、私は保険と保健と言っています。保険は階段で転んでしまったとか、落ちてしまったとか、いろいろなことがあり得るわけです。安心して行かすことができる場所なのかということで保険です。もう一つの保健は、アレルギーや食中毒なども心配し出すと心配ですね。プロのお店でも起こり得るから、100%完璧というのはなかなか難しいかもしれないけれども、少なくともその対応を考えていることが外にも分かることが大事です。そういうことを話していたら、子ども食堂を運営している千葉の方が、たまたま保険代理店の方で、なんとかできないかということで、保険会社などと交渉して子ども食堂保険をつくった人がいらっやいます。それも、自分の得意を生かして貢献した例ですね。

その5点が、私がいろいろなところで聞いている課題の最大公約数です。その中で、例えば職員研修の一環として、子ども食堂に社員を2人ほど派遣するといいい勉強になりますね。子どもたちが鍛えてくれますから。東京に社員研修としてそういう子どもとの関わりをつくっている企業も実際あります。

企業も、いろいろな人と触れあって、いろいろな価値観に触れることが、いい商品をつくること conditions であるという発想になってきています。

お金だけでなく、さまざまな人たちの貢献があり、そういう貢献をしてくれることが育てることにもなるのです。それは、子ども食堂だけでなく、子どもそのものを育てることになります。

小西さんのところはどんな課題がありますか。

小西

先ほど先生が言われている2番ですね。来年は助成金がなくなります。では、その後はどうしていったらいいのかなというところがあります。そこで、地域にはたくさんの企業がありますので、その企業に



対して子ども食堂への理解と、参加してもらえるように、私たちが足を運んでいかなければいけないと考えています。足を運べば「うん、なんとか考えましょう」という返事が返ってくるかなという会社が3店舗ぐらいありますので、そこを中心に頑張って、これから行かなければいけないと考えています。

湯浅

スポンサーの話ですね。スポンサーといってもいろいろな意味があると、冒頭に会長がおっしゃっていましたが、先ほどの、3百か所、3千事業所、3万人、そして3億円という、3揃えがあるのと同時に、子どもの笑顔のスポンサーはモノやスペース提供でサポートする。モノは食材とかでスペースは場所貸し、場所の提供。お金でサポート、商品でサポート、体験の提供でサポート、いっしょに遊ぶボランティア、ちょっと勉強サポートボランティア、食育サポートボランティア、and moreで、他にもありますね。

そういうことをできる人が、できることを、できるところから、いろいろな人が取り組んでくれるといいいのではないかと思うのですが、こちら辺の大きなバックアップを県としても考えられることがあるのではないですか。

三日月

おっしゃる通りで、このスポンサー募集を社協の皆さんや呼び掛け人の皆さんなど、いろいろな方々と一緒に進めていきたいと思っています。

まず大事なことは、「こういうことを始めました」「こういうことをやっています」ということを、より多くの皆さんに知っていただくことだと思います。ですから、プロジェクトそのものをお知らせすると同時に、企業や事業所の皆さんが社会貢献の一環として、「子どもの笑顔」のためのサポートに取り組んでいることを広めるために、滋賀県の公式ホームページに掲載したり、スポンサー証をお渡ししたりするなど、県もしっかりバックアップしていきます。

湯浅

そうですね。あと、就職説明会のようなマッチング、「うちはどういうことを求めています」というようなところに企業さんが来てくれて、「これならうちではできる」というマッチングの場も考えられますね。

三日月

就職先を選ぶ際には、その企業や事業所がどのような社会貢献をしているのかということも重要な観点なので、企業情報としてしっかりとお届けすることが大切です。

先ほど始動宣言をしていただいた大道さんは、滋賀の経団連の会長で、経済団体のリーダーでいらっしゃいます。私が、「滋賀はいいな、すごいな」と思うのは、こうした取組に企業の皆さんも関わってくださるところです。今日、参加されている方には、企業関係の方もいらっしゃいますので、ぜひ、企業の皆様にも、できることをやろうという輪の中に入れていただければと思います。

私はこの2月に、京都で毎年行われる関西財界セミナーに参加し、「子ども食堂」のテーマで議論をしました。金融機関の方のお話では、企業の社会課題解決の取組、例えば子ども食堂等への関わりを投資の評価項目の一つにしているということでした。

われわれは県を挙げてSDGs（エスディーズ）（国連の持続可能な開発目標）の取組を始めていますが、「誰一人取り残さない」という理念で、企業や行政、地域の皆さんと一緒にやっていることが、「あそこに住んでみたい、あそこで働いてみたい」ということにつながる時代に入ってきています。そういう呼び掛けや指標づくりを、ぜひ一緒にやっていきたいと思っています。

湯浅

持続可能な地域づくり、社会づくりの一つとして位置付けていくということでしょうね。

この間、沖縄に行ったときに、吉本興業の人とずっと一緒でした。吉本興業は今度、沖縄にエンターテインメントスクールをつくり、そこに子ども食堂をつくるそうです。子ども食堂をつくるからにはちゃんと勉強しようと、取締役などそうそうたる方たちが来ていました。企業の中にも、そうやって動き出しているところも結構あるので、自分でやるまではなかなか大変だと思いますが、いろいろなかたちで関わってくれたらありがたいなと思います。

この3百、3千、3万、3億という大きな数字があるにしても、取りあえず、できることは目の前の一



歩から進めていきたい。そういうところで言うと、いま、次にこんなことをやってみたいとか、ここをこういうふうにしたいという話など、ご自身の目の前の課題の辺りから一言話していただいて最後、皆さんに呼び掛けをしていただければと思います。

北川

目標値は大事だと思います。しかし、数字や成果ばかり競ってもいいものではないと思っています。「誰が」、という「人」はすごく大事で、子どもたちを育てていく人もかなり重要だと思います。単に場所をつくって子どもにご飯を食べさせたいというのではないと思います。仕組みが先にあって、そこを一生懸命にするのではなく、自分たちの自主的な行動が仕組みになるように、そういうふうになりたいなと思っています。

小西

私も、地域をしっかりと見つめていきながら、子ども食堂に置いている目標を目指し創りあげていきたいということです。そして、3年、4年で終わるのではなく、長く続けることによって成果が上がってくると思っています。その辺をしっかりとみんなで協力し合ってやっていきたいと思っています。

三日月

先ほど湯浅さんがおっしゃった、子ども食堂の五つの課題については、「遊べる・学べる淡海子ども食堂を始めてみよう!」というパンフレットの中に、答えやいろいろな事例が書いてあると思います。「やってみよう」「やっているけど悩みがある」「続けたいけど課題がある」という方々と、私たち行政や社協の皆さんが寄り添って、一緒に考えて行動していきたいと思っています。

また、行きたいけれども行けない、こうした場があることを知ることができないという人たちにも知ってもらう必要があります。例えば、一人で寂しそうにしている子どもがいれば、「こういう場があるから行ってみない」と話しかけるなどのつなぎ方ができれば、運営していただいている皆様方のお手伝いができるのではないかと思います。

それから、私は今年の1月に行った子ども食堂で大変感銘を受けました。米原市の大野木長寿村まちづくり会社の皆さんが運営している子ども食堂は、まさに、「地域の中の困り事について何かできることがあるのではないか」ということで始められています。そういう好事例を社協の皆さんと一緒にどんどん広げていく。そこにも私たちの役割があると思いました。

最初に大道さんが読んでくださった、この始動宣言が私はとても好きです。「台所の音、ごはんのにおい、よそゆきでなく温かさに満ちた言葉のにぎわい」が県民の皆さんの幸せの表現であることを、職員の一人ひとりが心にとめ、努力を積み重ねていきたいと思いました。

湯浅

ありがとうございました。今日お話ししたことは、まず、子ども食堂を地域づくりとして運営されているところはたくさんあって、そちらがメインだということでした。もちろん、いろいろ課題を抱えている子どももいますから、そういう子どもはきちっとキャッチできて、しかるべきところにつなげられるという、「隠れメニュー」とも言いましたが、課題解決に至るルートを持っている必要があります。そういうことを、運営の方たちは十分意識しながらやっています。

そうした地域づくりは、子どもだけの問題というよりは、地域の未来を創っていくことで、地域に愛着を持ち、居場所を感じられる子どもが大人になっていく、それが滋賀の繁栄にも結び付いていこうという意味で、地域社会の発展というところと関わってくるのではないかと話もしました。

では、それをどうやって応援できるのか、どうやって関わられるのかというところで、皆さんのいろいろな取り組みにかかわっている方の紹介、五つのポイント、そうしたところで、いろいろな人たちといろいろな関わりができる、自分の得意を生かせばいい、そういう話もありました。

こういうことができないと駄目なんだろうなと限定しないで、自分の持っている資源、それがお金なのか、場所なのか、人なのか、つながりなのか、将棋なのか、テニスなのか、いろいろなものがあると思いますが、その資源を、こういうことだったら使えるかなと考えていただけると、きっとそれを待っている人がいるということです。

今日はそうしたことを話してきましたので、これが終わった後に、ぜひ、「さて、何かできるかな」と思いながら帰っていただきたいです。そういうことをお願いして、このシンポジウムを終わりたいと思います。ありがとうございました。

(文責：滋賀県社会福祉協議会)

日本国内でのボランティア活動中のケガや賠償責任を補償！！

平成29年度

ボランティア活動保険

全国200万人加入！！

保険金額

保険金の種類		プラン	Aプラン	Bプラン	
ケガの補償	死亡保険金		1,320万円	1,800万円	
	後遺障害保険金		1,320万円 (限度額)	1,800万円 (限度額)	
	入院保険金日額		6,500円	10,000円	
	手術 保険金	入院中の手術		65,000円	100,000円
		外来の手術		32,500円	50,000円
	通院保険金日額		4,000円	6,000円	
	特定感染症の補償	上記後遺障害、入院、通院の各補償金額(保険金額)に同じ			
	葬祭費用保険金 (特定感染症)	300万円(限度額)			
賠償責任	賠償責任保険金 (対人・対物共通)		5億円(限度額)		

年間保険料 (1名あたり)

タイプ		プラン	Aプラン	Bプラン
基本タイプ			350円	510円
	天災タイプ(※) (基本タイプ+地震・噴火・津波)		500円	710円

<http://www.fukushihoken.co.jp>

ふくしの保険

検索

(※)天災タイプでは、天災(地震、噴火または津波)に起因する被保険者自身のケガを補償しますが(天災危険担保特約条項)、賠償責任の補償については、天災に起因する場合は対象になりません。

保険金をお支払いする主な例



ボランティア行事用保険

(傷害保険、国内旅行傷害保険特約傷害保険、賠償責任保険)

送迎サービス補償

(傷害保険)

福祉サービス総合補償

(傷害保険、賠償責任保険、約定履行費用保険(オプション))

● このご案内は概要を説明したものです。お申込み、詳しい内容のお問い合わせは、あなたの地域の社会福祉協議会へ ●

団体契約者 社会福祉法人 全国社会福祉協議会

〈引受幹事
保険会社〉 損害保険ジャパン日本興亜株式会社 医療・福祉開発部 第二課
TEL: 03 (3349) 5137
受付時間: 平日の9:00~17:00 (土日・祝日、12/31~1/3を除きます。)

取扱代理店 株式会社 福祉保険サービス

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3丁目3番2号 新霞が関ビル17F
TEL: 03 (3581) 4667 FAX: 03 (3581) 4763
営業時間: 平日の9:30~17:30 (12/29~1/3を除きます。)

この保険は、全国社会福祉協議会が損害保険会社と一括して締結する団体契約です。

(SJNK16-16921 2017.2.3作成)



“子どもの笑顔”のスポンサーの方々

★公表を了承された企業・事業所名および個人のお名前を掲載しています。 (平成29年10月3日時点)

【 企業・事業所 】
株式会社 平和堂
大阪ガス株式会社滋賀事業所
社会福祉法人 良友会
しらゆり歯科クリニック
特別養護老人ホーム えんゆうの郷
有限会社 伴自動車
個別指導塾 サクラサクセス
cocoroiro Gift market
特別非営利活動法人 環境と農業の融合を考える会「鹿深の杜」
株式会社 匠工房
NPO こもれ日小田莉家
合同会社 草の根塾
ファブリカ村
社会福祉法人グロー 老人ホームながはま
LA PLUS 共有センター
まちのほけんしつ きずな
株式会社 千成亭
有限会社 Ihoujin
NPO YORISOI network
合同会社マナブル
富士産業(株)ふじっこ青空ファーム
辻村写真事務所
KCS センター甲賀院
みつカフェ・サロン
株式会社 オフィスアル

【 個人 】
川那辺 一子
待 文麻呂
加藤 佳孝
横田 昌子
西方寺 牧 哲玄
長谷川 すみ子
衣斐 陽子
平田 都子
岡田 祐子
他匿名8名

(敬称略)

★現在 25 の企業・事業所と 17 人の個人の方々にスポンサーにご登録いただいています。今後、「子どもの笑顔はぐくみプロジェクト」のホームページに掲載します！



【編集後記】

1987年11月8日の正午。全国から集まった約26万人の人たちが手をつなぎ琵琶湖を抱きしめました。「抱きしめて琵琶湖」です。この運動は、老朽化した第一びわこ学園(当時)の新築移転のための費用調達を応援することを目的に開始されました。この日、「水と命」をテーマとして、琵琶湖の大自然を抱きしめ、自然や人の命の大切さを26万人が共に考えました。当時学生であった私は、学生ボランティアとして、第二びわこ学園の利用者の方々と一緒に手を

つなぎ、つないだ手を高々と空に向かって掲げた感動を今でも鮮明に覚えています。

「抱きしめて琵琶湖」から30年。今度は「滋賀の子どもたちが人を愛し、人を信じ、自分の力で将来を切り拓いていけるよう」(始動宣言より)子どもたちを抱きしめます。

次世代に潤いのある豊かなコミュニティをバトンタッチするために、「子どもの笑顔はぐくみプロジェクト」を大きなムーブメントにしていきたいと思います！

